空白・表現・自立

翁長　直樹

かつて日本本土に住んだことのある沖縄人にとって、一個の人間として生きることは、即日本を相対化して生きることができるか、ということであった。自意識が強ければ強いほど、沖縄人としてのアイデンティティを強烈に希求し、そうでない者は、同化し、あるいは曖昧に日常をやり過ごすことで逃れていたように思う。

沖縄にとって日本とは、アンヴィバレントな感情なくして思い浮べえないものであった。憧れと、憎悪ーこの二つの感情が辺土岬の彼方、27度線で音を立てて弾けていた。

戦後40年は沖縄人の中で、自らの中に日本自身を相対化し、明確で、強固な固有のイメージをつくり上げるのに充分な時間ではなかったように思える。

復帰とは、沖縄人にとって沖縄の固有な心性が、大きな力（本土）によって踏み潰されるのではという恐怖の体験であった、と言っても良い。

「珊瑚礁の岩壁に波が烈しく怒り叫ぶ」伊江隆人は当時の自らの心情を、この16文字に託して、初めて近代詩文書で表わし毎日書道展に入選する。伊江にとって学生時代の苦い差別体験が、書による表現ーアイデンティティの欲求を促すことになった。それ以後伊江は強烈な表現の要求を押えることができず、書による自己表現の世界ー墨象の世界に入っていく。

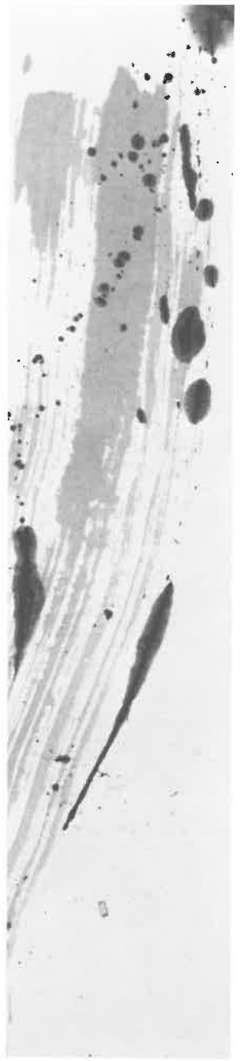
伊江にとって、日本（他者）に対する固有な心情を共有のイメージとして書で表わすことが、第一であった。伊江は「あかばなー」と「珊瑚礁」を、表現主義的に書きまくった。それはまさに沖縄人の危機的心情を書きなぐったものと言って良いだろう。

「あかばなー」は、伊江のそれまでの書のあり方からするとかなり異質であり、横長の紙の上方から「あかばなー」の文字が鈴なりにぶら下っていように見える作品である。文字は丸味をおびて、幾重にも重ねられ下方には空白を残している。「あかばなー」はいろいろな意味で沖縄で良く使われているイメージであり、ある意味で手垢にまみれているが、それにあえて挑んだ伊江にとっては、どうしても書いておきたい文字のひとつであったのだろう。

本土を相対化するー沖縄における独自な表現の確立を目ざすこと。伊江隆人にとって墨による造形とは、白紙（沖縄）の中に、墨がにじむように新しい伝統を作り上げていくことだったのであろう。

■伊江 隆人　プロフィール

1947 沖縄に生れる
1975 第1回個展フランス・パリ(墨象)
1968-81 68東京展 71毎日展 79玄美展玄美賞受賞その他
1983より 美術展(平面部門)抽象水墨で出品
1983 スペイン美術賞展初出品
1984 ホアン・ミロ国際ドローイング展
1985 神奈川県展芸術公論賞受賞
1985 ポーランド文化省主催平和国際青年美術展（日本代表出品）
1986 トロント国際ミニアチュールアート展
1986 個展1.80×40mの作品(県民アートギャラリー)
1986 墨のパフォーマンス3×100m(大道小学校校庭)

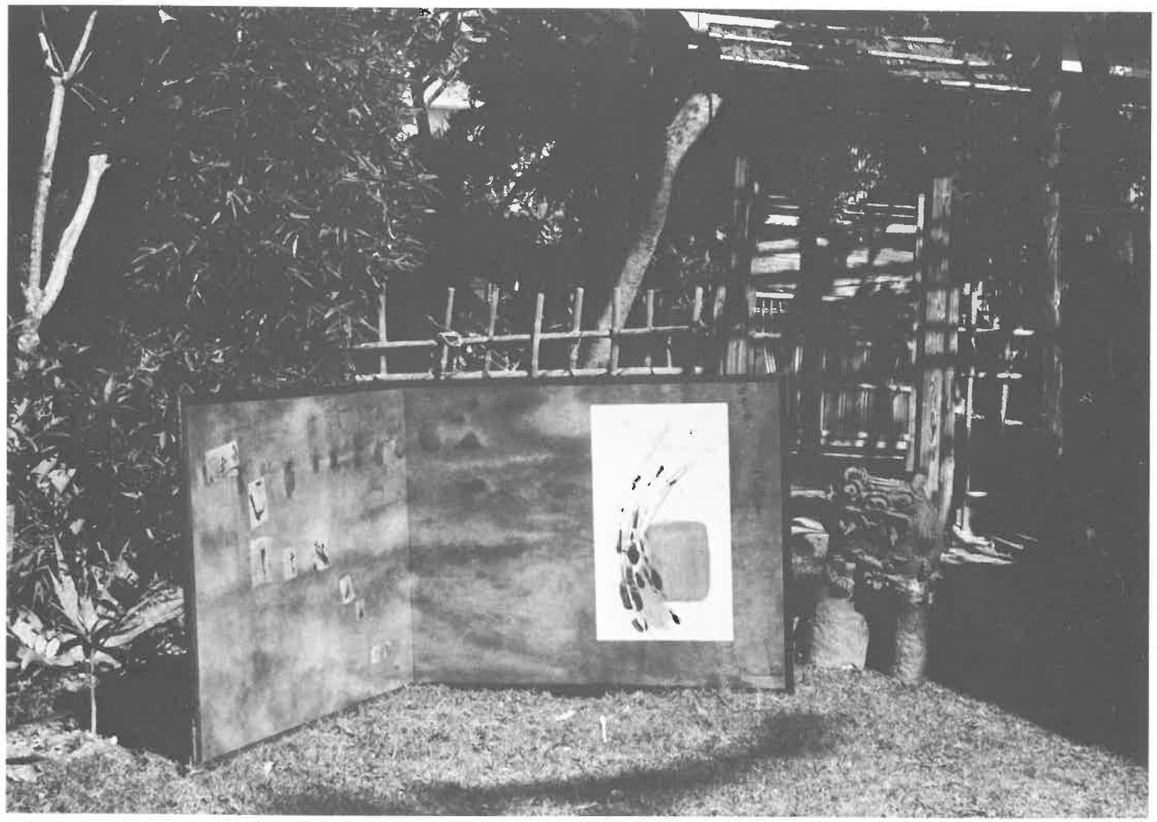


無題　67.5×14.5㎝　1986

TAKUMI ART NEWS　制作発行：画廊 匠　1987年1月1日　No.10
画廊　匠　宜野湾市大山３１２番地
Phone 09889(7)7981

87企画ー1　伊江 隆人 展　1月1日㈭ー2月1日㈰（月曜休廊）

GALLERY TAKUMI



無題　80×200㎝　1986